

にかけての寒さを予測して水の張り込みを加減したようである。普通は三センチくらい、特に厳寒が予想された時は五センチくらいの水の張り込みをしたようである。だいたいこの仕事が朝飯前の仕事であった。

日中は小鳥を追い払うことも糞を水に落させないための大切な仕事だったと思う。翌朝になると前に凍った氷の上にきれいに凍結している。こんな作業を何回か繰り返して四〇センチ程度の厚さになると、氷の上に尺縄を使って五〇センチ四方くらいの筋をつけ、巾広で丈のつまつた氷切のノコギリで切割り、池から三メートルくらい低い所にある氷庫の中までスベリ板のせて落した。中にいる人夫がそれを手際よく並べ、氷と氷の透き間に挽糠を詰めた。最上部は特にたくさん挽糠で覆い、次の切出

輪を刻むことになります。私事で恐縮ですが、私が市議会議員として市政に関わるようになつたのが昭和三十四年のことです。で、来年は丁度三十年となり感慨も一入のものがあります。当時の有権者は九万八百人余で立候補者は六三名、この年の当選者は現在八期になる現職は、早川武男・三井五郎・内藤秀治の各議員と私の四人です。

土用になると氷の出荷が始まる。四角に切った氷をむしろに包み馬の鞍の両側に一ヶづつけて運搬した。通常は五頭、時によつては十頭くらいの時もあった。氷が溶けてだらだら落ちた氷が、跡を残して長く

本市は来年で、いよいよ一世紀という年輪を刻むことになります。私事で恐縮ですが、私が市議会議員として市政に関わるようになつたのが昭和三十四年のことです。で、来年は丁度三十年となり感慨も一入のものがあります。当時の有権者は九万八百人余で立候補者は六三名、この年の当選者は現在八期になる現職は、早川武男・三井五郎・内藤秀治の各議員と私の四人です。

昭和三十四年といいますと、四月十日に皇太子殿下の御結婚があり、パレードのテ

続いたこともおぼえている。暑い夏は氷の値段も上るが、下町まで運ぶのに時間がかかるので、間屋へ着く頃には半分くらい溶けたこともあつたようである。

冬から土用までの長い間苦労を続け大勢の人手によって造られた氷が、一貫目いくらになつたのか何の記録も残っていないのは残念である。

(||投稿||)

あ の こ ろ • こ の こ ろ

小 沢 紗 雄

青沼に製氷会社が出来てから積翠寺の天輪の跡は昔のままはつきり残つてゐる。甲府近郷では珍しいものと思われ、いすれ標識でも建て後世に伝えたいと思う。

本市は来年で、いよいよ一世紀という年輪を刻むことになります。私事で恐縮ですが、私が市議会議員として市政に関わるようになつたのが昭和三十四年のことです。で、来年は丁度三十年となり感慨も一入のものがあります。当時の有権者は九万八百人余で立候補者は六三名、この年の当選者は現在八期になる現職は、早川武男・三井五郎・内藤秀治の各議員と私の四人です。

一方、八月十三日夜から十四日にかけての台風七号は、激しい風雨により市内に空前の大被害を及ぼし、さらに九月二十六日

には伊勢湾台風とよばれた一五号の影響で、再び大きな被害を蒙ったのでした。私たち議員は、地域の方々や市職員らと共に昼夜を分かたずこの災害復旧に努力したところであります。これは私が議員となつて初めて取り組んだ大きな仕事でした。

さて、昭和六十三年一月一日の甲府市の総人口は二十万四四四人ですが、三十四年當時は十七万四二二三人でこの三十年近くの間に二万六二二一人の増加となつています。また世帯数は現在の七万八九四世帯が當時は四万三五七世帯にすぎず三万五三七世帯もの増加となつてお、一世帯当たりの構成員も三十四年四・三人が現在では二・八人とかなり顕著な核家族化の進行がみられます。一方、この期間の推移を市の一般会計当初予算の比較でみると、六十三年度四七四億三〇三四万六千円が三十四年度は八億四二六三万二千円で、物価の上昇などの関連もありますが約五六・三倍、歳入のうち市税は、六十三年度二八四億七〇〇〇万円が三十四年度四億七一四三万一千円で約六〇・四倍となつてお、これからみてもこの甲府市がいかに発展してきたかがうかがえるところです。

天 気 予 報 と 警 察 電 話

三 井 利 恵 子

私は、昔の新聞を見るのが好きです。歴史の教科書にはでていない、昔の人々の暮しぶり、価値観などが生き生きと伝わって

私のこれまでの任期中、市長は四代にわたりますがそれぞれの市長は、その時代に応じて最大限の努力を傾注し甲府市の発展に尽されました。それぞれの時代、特に印象に強いのは、鷹野啓次郎市長は、三〇万工業都市を標榜し公共下水道事業に着手するとともに行政の経営化をめざした市独自の行政改革に取り組まれたこと、また雄途中ばにして惜しくも急逝した秋山清市長は、都市基盤の整備に熱意を示し生活関連道路舗装など道路行政を積極的に推進され、河口親賀市長は、六十五歳以上老人医療費の負担軽減に勇断をもつて踏み切るなど福祉対策に意を注がれましたことなどです。また、現在の原忠三市長は、国体の成功をはじめ、甲府駅の近代化や駅周辺の整備など、とり

わけ都市の活性化に意を注いでいることを挙げることができます。
今、これまでの市政のあゆみを振り返つて現状をみると、新たな時代に向つての変革の時期にあることを感じます。二十世紀を展望した甲府市の重要な課題としましては、市制百周年記念事業の推進・北部山岳地域の振興・新都市拠点整備事業や南部工業団地建設事業の推進、さらにはリニア中央新幹線や中部横断自動車道の早期実現などがありますが、市制百周年をステップとして、明日の甲府のまちづくりをしようという市民の力強いいぶきを感じ、心を新たにしているこのごろです。

(市史編さん委員)